

披沙揀金

二十三  
二十四

			二五	和書門
一	二	九	一七	
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
五	二		和
九	五		
函	一		書
五	四	七	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 25171
冊數	14 (12)
函號	159 138



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





披沙揀金卷第二十三

明治十二年購求

沙教諭あそびの事

一 権現様御名に於ては活礼の至氣と同事也勝る里た系

時にか際ううもては好くねとのこりうりうり時

か勝る事かあれありてと活り礼をうれは

活る事か小者ても礼るもの武切雜記

一 権現様と作りの天下の主ありてはけし勤む為

養二ツ有し馬と水と之是武の名代の有るねとのあり

何とあいなすし馬と米と米の國の通用は

馬の飼養をては道理あり故に刀の目利を

厚うし不絶腰る主人は刀振指新

身



















彼迷惑とある如何振の事なりやと云ふ小僧言て  
云々々々々々々々是れをいふ存の義なきは神中  
當り迷惑ある事三ヶ條あり一は師の坊髪成  
りりあり二は師の坊髪成りりあり三は師の坊髪成  
利力の先れ入るもありて血ありて血ありて血ありて  
彼これいふ二は味増の坊振は味増の坊振の悪と云ふ  
胡文ありちやと彼これいふ三は用と云ふ香  
隠く余りいふ又吾隠しけり曲事とて折檻あり  
中の押箇振の坊振あり一は師の坊髪成りりあり  
やと云と親をいふ坊振の事なりやと云ふ坊居り  
より難く坊振の事なり如何に坊子より百五だれ  
〜〜夫ハ師の坊の木屋ありと云勝一師時より寺人

行住持よをいふ山々有是中立小僧と百五〜  
〜師の坊あり〜云振也〜河門の坊あり〜坊あり〜  
ありあり身をいふ坊の二人の親と云何と云出家と違  
させ度と存り〜人遠り〜稀成〜坊〜や〜坊  
小僧あり〜と彼これいふ危や角と云ふ心〜坊あり  
家と違り〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
去法旦那方の坊ありとあれ〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
あり先味増の坊振の悪〜別義あり坊あり寺あり  
家と味増をいふ坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
塗坊ありの坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり  
坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり〜坊あり







之道と勅諭——王家を治り君安全を行ひ民の憂  
を除くを云れ世は武臣の嗜むに流るる人は捕らへ  
苦しむる人々を喰ひて瘡痕を成るる人死する人  
倣ふはありて勇氣を仰ぐに武臣を云れ——礼せ  
りて武臣を云くを云くは流るる人の心と嗜むる  
治るる人——治せし武臣を嗜むに流るる武臣の  
三つは百姓の苦の一粒百は——前年の秋より  
九折とて辛苦——そとを云くは流るる武臣入又  
穀の流るるを云くは流るる——地は流るる法  
人といふは流るる法人と云くは流るる  
五折より今秋は流るる百は——苦く血の涙を流るる  
ありて流るる人——一飯を食むるに武臣の苦を云く  
を云くは流るる武臣の苦を云くは流るる——先

五折は所人ありて交易——法人は肌を流るる身は暖  
め自由を云くは流るる——む衣食住の三を流るるを云く  
は流るるを云くは流るる——又肉を流るる肉を流るる  
肉は肉を流るるの百事を云くは流るる——ぬ事  
將軍家と幕府と云肉の流るるは流るる——是  
王法に柱を流るる障子に流るる——外のか  
軍法ありあり——幕府と云幕府に流るる——流るる  
府の家也此を流るる——流るるに流るる——  
太平の時より武臣幕府を流るる——流るるの  
と事——流るるを流るる——流るるの  
新瓦の流るる——流るるに流るる——一時  
を流るるを流るる——流るるに流るる——上



憲政進く今川氏去りて此後理をたまひ国家滅亡  
せり又天子は後香野院醍醐天皇謂とてつる御戦とあり  
後ひ玉脚を悩まるとして之のころの皇子とあり又  
去りてつひつるふ玉家の后とありつるのさねあり又  
因家と殿上とて圓白と殿下とて將軍と殿中とて  
是則玉地と表七玉地と指し定るとして事なりとのこ  
今有し且つい思ふに又せし思ふに御世生するに  
玉家の治れは一日の治り一日の乱るを承り殿中として  
治定せぬをを示すは是と云ふるの家業と深く勤るもの  
と承候と云ふに御中玉家承業の内して二度打負ふ  
一重なるを嬰兒とてもさひぬるとは是より依りて是より  
承業なる者と忘れとも大ゆゑは用ひては未だ一紙

あつてこの義理と云ふに又虚之性存多し一輕落者の  
必腹痛之腹痛似る者の癖とて著多し一少氏の有る  
味劣と成りて大縣逆を企むるに一却しては忠  
小たりと味劣なりとて大敗の基ありや武將の文  
武第一波りて事と能知りて家業と云ふ事一勤るといふ  
之を用ひては上意之趣ありたりと申す中井大祐  
と云ふに及し申すに初より此の心を承りての老  
若りては給と成りて百姓も甲州の八田城前の鼻軍との  
介ありて百姓御見りては者多し一是より中井大祐  
本原堂町人より物ゆゑの金六茶屋より一憲法後三  
不修し思ふに一他州物倍あり 故元法法  
一 寄席云或付に誰か役人の明あり付通役可と作付し



古今事考類聚の何某の事、人物の爲に括るる者、  
一、  
者、  
心易、出入未仕、  
あり、  
合、  
未、  
人、  
少、  
見、  
少、

明、  
年、  
指、  
思、  
心、  
語、  
と、  
右、  
求、  
厘、  
雅、  
出、



有る者ありて益物ハ何物の名物ありてハ肝腹の付用  
之を以て室の中の室と云ふ人として居りて其の  
我等者ありて其の移ハ云々事なれども夫を云々  
心ありて唯今の移ハ其もあらず其言をいふ  
其方ありて折ハ細ク出ハ心易クあり氣を和  
らして居る者ありて其移ハ其言をいふ  
侍の心ありて悪クあり其言をいふ  
志ハ輕薄者ありて其移ハ其言をいふ  
死ありて大ク其の家仲ありて諸侍を和知義を  
守りて其言家の元氣ありて諸侍の心ありて其言  
和を和知義ありて其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ

其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ

一

東照宮宮人ノ上ノ事ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ  
其言をいふ其言の思ハ其言をいふ



救ふ一今日自こ平の樂とありし故法氏とせしけ  
民の内むしと判れ米穀付産を信入るる事家のまゝ  
あゝとて盗賊と謂へしとてを去りしとて  
身と云へし先祖よ慈愛をうりし一勝を絶果し  
救ふ一とて是ふとてを去りしとてを去りし  
北条の主人の子孫を去りしとて一旦北条の行あり  
是のふとてを去りしとては是と好事し  
又此法とて是のふとては是と好事し  
又細川持元とて祖文武藏と判之り行跡と學と  
て北条の行とて是のふとては是と好事し  
行の去れとて是のふとては是と好事し  
表露せり持元の子政元と判之り將軍と判之り

山殿乃徳と文と葉陽の事と判之り  
尊氏此行跡と判之り  
逆の者を退治し下は天下を統一統せんと  
昔より之の事と判之り  
今も其村と判之り  
おろろと判之り  
家と判之り  
新と判之り  
一秀若との事と判之り



一 家康之山形より来りて世を治るる者其を福徳と  
爲すは其の理を知りてそのまねはしむるに由りて  
山形に於てあるは其の利よりして其の不便を去りて  
其の由りて其の世に是れ上と見ゆらん其の分を  
自他と幸来りしを其の教の徳に依りて其の家  
上と爲すは其の事若し其の分を七字の分と爲す  
其の分の上見ゆる七字の分の徳を去れば此二つを  
幸ひと爲すは其の事あり其の分は其の事は一重の上  
んをりて其の考へて見ゆらん其の上と見ゆるは  
存ありて其の分の上と爲すは其の分の上と見ゆるは  
所あるに依りて其の分の上と爲すは其の分の上と見  
腰の徳と爲すは其の事ありて其の分の上と見ゆるは

ゆらん其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
若し其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは

頼波集

一 家康云 秀忠云 浄教訓よ人せ侍よ能く其の  
方よ一平の本何んよ二平の分ら一平の目も白鼻と  
其用の佛れ其を佛と人信し其を何ぞ目と及  
利生あるは其の分の上と見ゆるは其の分の上と見  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは  
其の分の上と見ゆるは其の分の上と見ゆるは



其儀の形ありげんと心く四人と見移れりる菊  
民のまも成て大切の賑の付新之又今浪の面あり  
肌よ除くゝ雜紋の跡もかき消し人々のかゝのこころ  
とよむゆふ持ちあふとの人の能ありと作の由也太平将士  
を法  
一 或時云海防正業侍長老舟揚侍法林道春何と申すは維  
後の序今世の末に女を儒と似し居の西之事  
何しとんくゝりゝる信と云衣の介少れ能く持舟  
戒行ある事以て酒を飲まぬを求む世の宗教す  
よはくは徳のさ修も徳を中興に用く我々全浪  
米穀を抛つ者とも信く者成り賢あり申す元人れ  
こころを淑く美実善徳を去ひお利用の事を  
あふふは是れ今世の假令臺塔をち居ても早竟と

夫物の養育するも若根伸種と云は是れくは  
くゝりゝる又儒者之言と續故事と云は詩文を  
信す又佛法を嫌ひ異端とんを信する人賢人の詞  
あれい定くゝる細くゝる今世の聖人か  
又佛法を捨くゝる世法去下の艱窮執物を捨くゝる  
法也むく書以て者れ女子あり衣脚を授け渡せ  
の艱難を遁く先忍辱の装束を去く法人の  
信者とも多し食とありんを安んずるむ又又  
あま婦女と居るあゝ娘と求む化粧する娘を忘と  
しゝる教戒と書くむいゝあむゝゝ父母  
かゝる子を養ふ事ゝるゝる同物ゆゝせに忍辱しては  
法に授け戒えと難く是れ今世の徳を去りて子なく







由(由)旗印元ねるのゆひやうすつり志未昔流あり  
元倍五色より上りすすかき元倍よりして結  
あり 氏造雅法

一 家康公或ともは船よりともは米の船中清目ありき  
中を以て天野五中支活能の料理庖丁信時より上り  
形より花出少と五席を更さるるたのより持し由著  
しり接し元上げれば多依流も物と信りしりともりて  
伊前より御感と信りしりともは米の船中清目ありき  
いたしけりものと上意の信りしりともは米の船中清目ありき  
を後或時の事し君と云下と信りしりともは米の船中清目ありき  
はり事何より下り信りしりともは米の船中清目ありき  
秀忠此物より定りしりともは米の船中清目ありき

いより一より大抵親と増と介より信りしりともは米の船中清目ありき  
かしりしりともは米の船中清目ありき  
とのあり支流し我時と信りしりともは米の船中清目ありき

秀忠(の)恩かりある我丈より信りしりともは米の船中清目ありき  
弟思ふ多しけりありと上意ありやの信りしりともは米の船中清目ありき  
前より天野より事し不審ともは米の船中清目ありき 類波集

一 神君(前)場半入り者山岫より信りしりともは米の船中清目ありき  
座屋座より年取と信りしりともは米の船中清目ありき  
一系よりと信りしりともは米の船中清目ありき  
中より信りしりともは米の船中清目ありき  
しりともは米の船中清目ありき  
老人より信りしりともは米の船中清目ありき







中泉右老物語

一 権現様夜挑灯とてつて性還信とのをい御志よりと  
持より我方とて人に見てとて向い不見損多と  
上より首村城通伴物語 前編四蔵開書

一 福作左衛門大夫正則安藝備後右衛門と評願とて入部  
のこれよりつて時家老三人の者も御目見御付とて也  
一書よりこれ備後寒湯の城も福作母後大なるらんあり  
備後二好積山城も尾園石見も三つはあり三番備後  
東城の城主長尾年人御目とてつてわつて出  
家康云の御流も重兵とてつて見小性成の中とてつて  
兼つて笑出せ人々有つて右中継お舟の以後  
一 家康云見小性成の事向せつてまはる由五腹とて在る今

福作の家老とて見つて数ひりる何とてや定て  
三人ありつて片備者あれとてつてとつて数ひりる  
人間に我と人とは何れなる所の想とては出つて五折不具  
あつてんと申つてつて上は今の人の言つて武意揚敷  
有つて大別の武士とてあれつて福島の家中とて立  
身とてはとつて家老とて経より既よ 家康の言  
つてこれとてつてつて武士の名もつたれ世評心と  
浦山とつてあやうり度とて思ふ心あつてつて事  
有る言よ何れ思つて分列つて事記とて唯今の如  
つてつて見つてつて其言信とてつて成人とて違つてつて  
世間とつて名とつてつて事とつて成つてつてつてつて武  
士の言もつて付ね片備者も成つて合意とて宛め稱へ武意の



おせうれぬとあるを能く分別作り見せんとし信二三日  
向河城嫌悪く思座あられりとも也 若岡信後別集

一 大坂方の河津前片桐市山崎秀穂郷の由を可と肖く  
撰別集本の居城(河津) 家康公の河津方とある由を  
外に坂の津に在り紫山小を傍工坂間道所と云ふるも  
由を可と合味方とありて難敷とありし片桐  
岡東の由味方とありし餘り紫山と急難と見つらむ  
ては不おけと只ひ由路の因少く河津の由海原を  
尾ヶ崎と在り紙信他より和少く南北の者(相済)紫  
山を因り致して治り来りし由を可と片桐の家  
来りし此旨と信し急き尾ヶ崎(地)りあるは早坂の  
浦と巨坂よりとつらむ有るは河津す城なるは此小橋なる

取濟ん事いふ可ありし亦寄評候と致す外に大庄  
修理人教大坂より来りし尾ヶ崎近邊の野武士と  
治し一揆を起しつらむ付片桐と兵士難敷とありし  
尾ヶ崎の城中(信)と立加勢と出さるる友ありし候と  
信し城中(入)らるる何もの及少と今度の義とあり  
少合方と射入しと城なる建初平所とありと云ふも未  
知なるは信し松平氏藏方より家康地田城前宮  
城院後南部城後と云者武切の者も一人教を指  
添信見しとて此城を指並出有るも亦寄右様と  
加勢と出の義と城中(入)る義も難敷者通言ふ及し  
片桐の人教は相と不及此上とありとも若果の方と  
と志しつらむ知し一揆を起し治り大坂城と



次中より加りつれは伊丹近多より新へ片桐の勢と城り  
あり付死と違ふあり其初世上の石河津と尾ヶ崎  
城守の者とも石河津の仕敵前代末多あり但池田家  
加勢の者もあつた。今度の仕合より及ぶ事不審あり  
如何と申しつれは石河津も大坂一円通の要なり  
申らんが申筋なりと也此方を以て 家康より石河津を  
為らばよき成中し人ともなく也物もあつた陣中和勝  
以後二條の少輔に於て石河津表の城に寛政を身  
成る者家康の内より伊丹勝と申者石河津前  
に出され御申す尾ヶ崎表の事首尾中守りつる所  
に大坂津と申上段より尾ヶ崎の要に大坂津と申  
所より申す上西も通用れ地より大坂一攻に及ぶ可

存いさるる小形つれは何時人数と云ふ可なり難中  
ありと益夜たよを見誤者も申す城守如御用人  
仕に総領より片桐より石河津の由より城守に石河津何角と  
申通の内より大坂勢もお見へ申す所の一撥ありと記り  
ゆとわたりつれは城守少つれは是れはよき城守と云は信仕  
也市正事の大坂と離れ色味方より事と云ふ所の風流  
有り是れとと信取あり不存ありと云ふ所を上市正事  
信人と記り大坂方より一應一の仁と云ふ所の信  
守と信事不存と云ふと信守存と疑ひ有る所を  
城の人数多しつれは又可信取も不存所を不存小形  
内より加勢を備へたり城守御申す出付直言の所  
京の中より人数ありと云ふ所を信守と記りつれは城守



中の子候もある間敷ありとも世は産之多耶(加増と  
有敷と難仕心右の疑ひ有り)上小路ありは是は  
城内(茨野)と呼入馳をぶつてと作り方一城ととれり  
くい事一 内府様(の)不忠次(の)池田の家は瑾  
所成りて城中の者もお後と宛め片桐の者凡の  
事子位を不やりしと言上は是也 家康公大上御之服  
控され今もまゝくくやうくともぐく句とりて  
眼前に味方の討ちと見えくも不可様とあぐ家  
来ともよ中付くも 武州の心根も何折の子細も  
一と作(り)其は御座と為立と見奉り大悟  
たのちもく服指と括り跡へ投捨御側(遠寄り  
御小袖のまゝもよまがり是は御情と家康上意と

御座ぬ何く御姫様の御腹くく生もくくも  
武野守候御孫も思召も共今もかた不在  
りていりか分と作り物もく御座ぬと涙と流し  
上られ 家康公歩居くくより歩分くくも  
物もく武野守も此音と云ませく安堵させしと  
上意あり大悟も手と合せく行れと御前  
を立を誂く 家康公御座くつせ侍の御前  
伺ふの成候もさうらにあの大悟も親も大悟と  
云く酒自と三杯もつ店と節もく君守あり時  
馬の仕立中居より之先年長も今我の時親の  
胸入名の店九郎父子討死しとてゆきく每人  
討ちて古場新(店)と節も音付めくんとあつて



りしありり川返して連々退くと唐之印牒と之  
を有せしと云く鑿の鼻しと大徳ありと云を  
はげけつと云ふ二二町々同多つけしははるの因ふ  
血の流と出るとありとも播しと唐三席とつと云く  
退後し播別一山のまことありとも播の大徳あり  
右ありと者の子孫ありと云く今此大徳と主此為  
しと身と云をわきと云く見ありと云く為時

家康より前出此今の如くある事と云く者外ふ  
是く云く改題書いふと人持ありと云の上意也岩瀬集  
法別集  
一 神君尾張紀伊お家の家老成瀬集人正安藤常力  
と云く上意と云く方お人と云く所下出附の 神君  
薨御し後お殿 秀忠公を仰守之謀秘し心算し不

可くしおれしお新ありと云く京の路と云くお人し  
との心効ありと云くお方お人しと云くお人しと云く  
と代りて渡中お方お人し悟はしと云く上意と云く古上後法

一 或と云く 家康公并伊直政お多忠務柳原康政大久保  
忠世お多忠務親お多忠務孝山お多忠務お多忠務  
教輩と仰承しと云く古戦場の物語と云く古お家  
を唐より云ふお我はしと云く軍の要樞と云く案と云く  
凡大徳の意と云く軍兵と水なりと云くおの意の方多と云く  
隠しと云く大徳と云く隠しと云く軍の利と云くと云く  
隠しと云くおねの意と云く上意の隠しと云くお人  
おま何と云くお多忠務と云く信と云く軍兵と云く隠しと云く  
作と云くお多忠務と云くお多忠務と云くお多忠務と云く







思ふべき身之苦を日々に度顧むるは又四忠  
の者なりあ不信不禮酒宴嬉礼私曲且貞の政事を  
お針やと研と油ひかりし跡を懐しりる大将の  
外は何れも歎とさく内は志の味もあはし是れして  
國家治る天下平ふ事あり身立は苦賢人の  
と忠し朝言ふ及をさるひ倭共邪曲の人と遠  
く事終休と事きあうと事不自由と政屋の事  
玉中偏し和順す人し若忠逆を及の人をさく教逆を  
お企合然に及ふと事味方の人賢固し事歎  
志くけりあうと事石女のとみに義礼智信信りて  
天下國家を治むる規矩之源義経朝臣百首の軍方の作  
人吉成人の石つる人と地情を味方惟云事歎かす

何れもや義経の無き進退兼難将の人よ叶しりる  
一度も不覚なり事家康云作し若人の及を知  
るゆへに思ふべし事人ともみらさぬいし事是  
階ふ是と事事いりんを事力言く事一人  
連あまの自由よ事と成さる古人の詞よ事こと忠  
に立と事自由よ事事不覚業乃世の民  
の事事事の深きと事集に成麻の仲れ蓮と  
たの事事連こ又人とも苦忠なり事一の事海  
あり物あり事業若に新唱拍吹の人とも捨を日本の  
捕まは男女用し事利を待しり良将乃士を用ひる事  
皆さる事事事事家康云作あり事海ら何つる  
事しりて事事事諸家の大将の事事を案さるに奸曲







一 東照宮の御一私欲海を將よ玉郡とありし事なり  
を早しく古をなすべし一 倭報といふも道心といふも相  
あはれしぬ愁心ありありし一 又依怙是負の天下の  
しるべきの大根あり親族川業といふも横しと民此  
詔といふもよよ居しぬ理非のしるも抑理し海あり大  
れ徳を明ししすしあまく辱も今川氏元倭母との雪  
新報尚と有後ありぬの仕立といふも國とありし治りし  
とも家老れ感ありしと下も重舟近化の後今川の仕立  
元のしるしぬ一 清人疑ひ起る終る義裁元の  
子氏去よむるも國と名ひをり疑りしるも主將の依怙  
を起りて又家自一人威を振りしとまはれ海報といふ  
一 傷る者も辱る天下の罪人ありし一 いうぬを忠臣と

以て徳智恵己よあはれを智恵と人よ徳を同條末  
に和後しとてしるしと下も交悦の一国に一玉は徳悦も  
のあり主人も又二人を片付し一 侍あり大將の侍也  
又二人の居る者とも執柄とともはるし一 謙讓を  
忘て威を人よ徳とともはるし一 又作しとて  
公家の全張のしるし武家の徳のしるし一 全張言ふれ  
鉄の用の莫太よ志くは立穀竹木と判たり此を結む  
武家文家と建るは具也一 報治れ母相皆鉄乃  
力あり全張を好みむをとも是れ婦なりし服前の事  
しるし一 古徳よ全張雅貴は殿相とあり武士とありや  
しるし一 鉄心をしるし武家の武及を忘るし  
横ししるし刀服しとて只の巾よ童子身しとて性来



類成角一主疑ひ起さすも本家あり一是民家の  
かたをあらうて在るまの家来を深く憐れ家来を  
まををまのひ懸りてこそしうあれこれひうこそ世を  
りうとよ下ふは疑ひし情字人をを命合うてあはる  
一軍の情も個々厚くある古語に三軍此實に疑ひの  
起るこそ極くは家中奉りて疑ひりてこそ道極立座  
こや諸人は肉骨とらんこそしつひに此義ありを以て  
撰しこそ尊くは看すらんまを玉都とあらふと下柄とらん  
威ありて上帝奉云あり<sup>平</sup>矣竟然由は<sup>平</sup>故に疑ひ  
されこそを時方ふかふも疑ひなり一勝つと道理と云  
まををこそ<sup>平</sup>深あり物しつて法令とてうこそうこそ長將  
の所也臣の居つて一を初と忠とをうて切と大<sup>平</sup>に信

とて河別仁義の常士成層一又上意は國家意人  
んとていふ未弱は<sup>平</sup>屬を好む人<sup>平</sup>は家形也<sup>平</sup>成る  
武家の格或と意と<sup>平</sup>武と<sup>平</sup>兵と<sup>平</sup>を<sup>平</sup>家と<sup>平</sup>破つて  
う一懸りて<sup>平</sup>者<sup>平</sup>を<sup>平</sup>事<sup>平</sup>と<sup>平</sup>か<sup>平</sup>う<sup>平</sup>う<sup>平</sup>を<sup>平</sup>う<sup>平</sup>は<sup>平</sup>と<sup>平</sup>信  
を<sup>平</sup>も<sup>平</sup>を<sup>平</sup>身<sup>平</sup>と<sup>平</sup>人<sup>平</sup>と<sup>平</sup>指<sup>平</sup>し<sup>平</sup>ん<sup>平</sup>う<sup>平</sup>と<sup>平</sup>の<sup>平</sup>意<sup>平</sup>信<sup>平</sup>者  
との<sup>平</sup>か<sup>平</sup>ら<sup>平</sup>ん<sup>平</sup>と<sup>平</sup>に<sup>平</sup>君<sup>平</sup>と<sup>平</sup>も<sup>平</sup>た<sup>平</sup>の<sup>平</sup>意<sup>平</sup>感<sup>平</sup>と<sup>平</sup>も<sup>平</sup>せん  
事<sup>平</sup>と<sup>平</sup>あ<sup>平</sup>り<sup>平</sup>て<sup>平</sup>逆<sup>平</sup>は<sup>平</sup>を<sup>平</sup>家<sup>平</sup>と<sup>平</sup>棄<sup>平</sup>れ<sup>平</sup>の<sup>平</sup>眼<sup>平</sup>前<sup>平</sup>に<sup>平</sup>を<sup>平</sup>や  
賊<sup>平</sup>と<sup>平</sup>建<sup>平</sup>信<sup>平</sup>の<sup>平</sup>大<sup>平</sup>極<sup>平</sup>と<sup>平</sup>を<sup>平</sup>み<sup>平</sup>る<sup>平</sup>位<sup>平</sup>は<sup>平</sup>昇<sup>平</sup>り<sup>平</sup>て<sup>平</sup>詞<sup>平</sup>と<sup>平</sup>引<sup>平</sup>さ  
る<sup>平</sup>大<sup>平</sup>小<sup>平</sup>上<sup>平</sup>と<sup>平</sup>を<sup>平</sup>え<sup>平</sup>る<sup>平</sup>も<sup>平</sup>ま<sup>平</sup>に<sup>平</sup>忠<sup>平</sup>教<sup>平</sup>と<sup>平</sup>を<sup>平</sup>な<sup>平</sup>む<sup>平</sup>和<sup>平</sup>義<sup>平</sup>と<sup>平</sup>身<sup>平</sup>一<sup>平</sup>  
を<sup>平</sup>ら<sup>平</sup>に<sup>平</sup>や<sup>平</sup>よ<sup>平</sup>し<sup>平</sup>の<sup>平</sup>建<sup>平</sup>信<sup>平</sup>根<sup>平</sup>入<sup>平</sup>の<sup>平</sup>あ<sup>平</sup>ら<sup>平</sup>う<sup>平</sup>と<sup>平</sup>云<sup>平</sup>志<sup>平</sup>は<sup>平</sup>これ  
根<sup>平</sup>根<sup>平</sup>入<sup>平</sup>ら<sup>平</sup>う<sup>平</sup>て<sup>平</sup>平<sup>平</sup>城<sup>平</sup>と<sup>平</sup>信<sup>平</sup>も<sup>平</sup>常<sup>平</sup>盤<sup>平</sup>の<sup>平</sup>色<sup>平</sup>と<sup>平</sup>改<sup>平</sup>め<sup>平</sup>て<sup>平</sup>道<sup>平</sup>心  
を<sup>平</sup>信<sup>平</sup>と<sup>平</sup>建<sup>平</sup>信<sup>平</sup>小<sup>平</sup>を<sup>平</sup>と<sup>平</sup>う<sup>平</sup>り<sup>平</sup>情<sup>平</sup>字<sup>平</sup>と<sup>平</sup>た<sup>平</sup>の<sup>平</sup>ま<sup>平</sup>る<sup>平</sup>河<sup>平</sup>り<sup>平</sup>と<sup>平</sup>







先祖と母を見くく我輩を破り牙と舌の親を母と見く  
と云事孝子のせうに知る事父は孝ある人いふく  
忠んあゝん此後為家地家と云ふ先祖の家法を為  
家人何んか至方とん付居一徳政を善政と改め  
と云ふ事あゝん此後為家地家の法令うて是を國法  
すとして是を善徳の人と慈徳く粟飯の臣家此  
柄を執け々人民を若く金銀と云何多獲入く  
樂くすらんく古法を用ひて何と何と云ふ事  
天下の強弱は基ぞく金銀は富と國の富貴と云の  
事なり至の及と云切一徳業をく初く事我  
何多用ひて智あるく徳氏と徳育一子れ思ひを  
何と云く天下の富といふ事又人を見ればく

忠徳と云ふ我自信のんく人をあふと守持する  
との如り偽らんく偽をく己の如きり徳を  
忠を云ふ中、徳の事一毫と云く時たたらあ  
隠れあゝ天下の口舌似をすん孝臣をけしあゝ  
嗜く將軍に心と云ふ事一かや 夜話頭秘録



披沙揀金卷第二十四

沙教諭のそとにふれぬ事

一 紀州大納言新宣の曲し流りて我田父のとき  
 権現極西川特の節は川を流しせよと上意有り  
 手届せしむ世馬の足と令馬に左右よ人おけり  
 渡すとも馬よとて何ふなりと志すらん何ぞとてその  
 幸起しそあつとつらん右右のともとてとて業を  
 せよと御境河をて此奥なる新の足とて新しき流り  
 せよと御河河をてそのあち右邊とてとて二は入り此  
 飛城の小川ありとて何と飛城とて上意有り江東の時  
 とも免ぐるふの事とて時河ありとて思ひなきを御河  
 せよとて事南目とてとて思ひなき也とて度ハ作れ







夢見はたふしんふあ忘る事多しと少くも用はるる  
多しと少くも不秘文類多しと今日各人お侍りて  
侍りては知れぬれり也 若例在信別集

一 権理標は流石と信の事 將軍標より中多流後事は以  
由伺ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
我れお侍りて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
よせしるありたりあり 老子此之をのりてしる事  
事を知りたる者お侍りて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
思ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
遠い事伺ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事

知る居る事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事

一 権理標は流石と信の事 將軍標より中多流後事は以  
由伺ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
我れお侍りて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
よせしるありたりあり 老子此之をのりてしる事  
事を知りたる者お侍りて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
思ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
お侍りては知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事  
遠い事伺ひて知れぬる事 由用お侍りて後信後事は信の事







とあるはたゞ、固と記し、當面付と正し、大玉の才  
氏未とて安法は、やも、大智の人、一郡一郷の支  
配を、自らに務りて、有又、大智請、大智奉、能吞、こ  
中、貴、あり、智、言、と、の、又、い、あ、い、の、練、成、ね、ま、い、言、の  
と、ぬ、文、の、の、相、成、能、人、と、所、境、し、と、分、と、評、言、の、の、い、  
と、人、の、の、の、働、と、能、仕、成、し、の、右、天、下、此、奉、能、分、り、あ、い、  
より、し、暗、と、奉、出、し、と、分、及、う、と、と、分、な、い、げ、よ、う、と、一、の、疑、  
の、心、を、し、れ、と、と、分、な、い、よ、う、と、し、と、分、を、以、疑、ひ、の、と、下、又  
上、と、疑、ひ、の、下、下、疑、者、し、村、い、上、と、わ、う、の、心、難、の、天、下、此  
の、言、を、し、も、わ、う、な、れ、し、の、心、を、し、り、は、身、よ、い、成、專、要、し、村  
專、と、智、を、侍、を、し、相、又、上、下、と、の、心、疑、を、し、と、惡、人、能、見、付  
其、間、一、終、を、と、入、し、の、心、他、の、疑、ひ、の、心、人、能、見、之、の、味、を、し、  
中、の、心、付、か、の、大、智、大、智、の、言、人、と、の、心、の、心、事、分、り、と、  
終、人、の、身、者、の、人、より、大、智、の、心、事、分、り、と、  
組、人、と、の、心、力、と、係、合、の、心、事、分、り、と、  
よ、う、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
信、張、何、と、存、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
相、の、上、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
相、現、極、存、者、の、  
將、軍、家、へ、何、事、と、し、と、分、り、と、し、  
と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、見、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、再、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
居、り、と、し、と、分、り、と、し、  
將、軍、の、和、衆、者、と、し、と、分、り、と、し、

中、の、心、付、か、の、大、智、大、智、の、言、人、と、の、心、の、心、事、分、り、と、  
終、人、の、身、者、の、人、より、大、智、の、心、事、分、り、と、  
組、人、と、の、心、力、と、係、合、の、心、事、分、り、と、  
よ、う、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
信、張、何、と、存、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
相、の、上、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、見、り、と、し、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
と、再、と、分、り、と、し、と、分、り、と、し、  
居、り、と、し、と、分、り、と、し、  
將、軍、の、和、衆、者、と、し、と、分、り、と、し、







うさく身と捨せとけくきく人とし過とせしむ  
んうさくぬとのへ軍中し不浪奉久く大切此  
事公勅し者かの過行とてとらぬゆきと者か  
弟乃中かの者も頼母もなりと見阿なとりたよ  
いさかかんあくありて是全く上の階之主人下の屋つ  
らひと不入徳よ書せ家人の時を忠信の才を捨  
てて後人ゆくと入るに際ありて所是之三人とあり  
事感致し如世の所是身よ余り親有と書と再三此大  
愛しとて此所渡形か者書文章

一 神君し作ふ不忠し臣のことと成つし心氣も悪く形よ  
ちかりる如所し者と奉け用ありあり忠臣のくもて  
ま一人し不忠とてし族も出ぬくやんて心を書せん

我と心とひきも自分同言とて古の慣習を  
禮とて正忠と見くし形も不忠不孝も悪逆も  
よ見ゆと畢竟己世利とて懐く人かありの  
ある時と皆山口細子といふものしとていふは  
ありませよといふも是よといふも色ありとて  
後と悪く古法よ尚ほそて家くの何とて答あり  
定法も事とていふも自利たるといふも  
ある者ありに我いひて理を立るといふも  
その詞致して身と成れとのいふも  
危し先祖より辛苦しとていふも  
その不忠不孝者之を先親し苦勞を中とて  
乃親しとて積り諸人となるも國體よ治る人か







人の批判とせらるるをうらやまはしむるは威と背とをなす下の  
俾知色かつて推を水と名づくるは此の如く一は只よよ  
五好人も下あつて怒りてさういふ趣い上よあれるが  
まじしとあつてを余<sup>珠</sup>散らひしうきなきは源細十  
水と今を流れて大河を成しし人かま將するもの  
あり功き高山の禁よりしひのありて代知久しひし  
歎ひし牙をちゆはまじし軍は勝つて死門は一生  
と得るまの軍加ふるにたふさしと色を考てとくくま  
ま理しそむらうをまじしとす處しなるとんはな何れ  
意仁とい若政と施しと歎きしひあはま下ををあると  
稀しあは意告あつてしひとこと願う處し想しつ修て  
悪を何れと隠ししとまじしとつとさなまとの

偽し人しつて有ねる

いふものといふは

いふものといふは

夜活顯秘録

一 或とて 家康公作せし政乃の山とてあるは若政の  
開ふ事をいふは今すは及んて少あはれまじりこと  
為事のしはあつて歩出を為し自らは信ありとて  
歩出するは何者といひしとてまじしとれを為し  
んて納るは是とてまじしとて人のかある事  
のあり信長し明智とあつて討てんとし誰か知つて  
信長の一家歴て居るは秀吉は親の如きうたて榮る  
事ありまじしとてなけのありて天授の将師の







家老と見入るも思願はせらるるものなれば世治と  
考へて親の恩候もしくせしむる人とする  
も慈仁と考へしむるもあまの時の意するをその  
つゝ根はしむる人々もあつたりや 夜活頭秘録

一 東照宮と仰ふは臣を四つに家老申すなり 才上こそ  
大小を有れし君は侍を忠候の志をわしと考へ  
なるといふありし大將とすし人の肝要に事初より  
諸人の批判あり又その威をわしと考へしは後人せ侍  
繫する臣を不用しは成人を考へしと考へしと  
いふは君の臣は長臣とすの事よけしと考へし諸人よ  
うと考へしは根はしむる君を考へしと考へしは七の傳を

隨興惟慮願申達此七の理といふ

隨興といふ君は使ひはし移るるより天地陰陽春秋を  
果の財は隨ひ君はつと人臣と考へし年々の他相  
熟不熟に隨ひ時とすけの治乱と考へし世と考へし  
礼せし武治と考へし家業が師は隨ふん也  
興と大小上下の家臣其威と上より考へし謂ふこと  
天下の天下の政務は随ふると云ふことと考へし主の  
家と考へし其の好を考へし頼むことと考へし其の  
念入るは我ありと考へし其の身と考へし主君よ其を  
重この身と考へし其の身と考へし其の身と考へし  
治を考へし其の依怙具負ありし侍を考へし其の  
以の信と考へし其の退く時その信と考へし其の  
考へし



惟この政道の苦慮邦心とありんし、おのれ見し、終て  
ふまゆ信とつけ苦慮と執りしとあり  
慮し、事にならぬ、一郡一家の位を又、王下玉の  
控とそまじ、に逃ひらぬもの、とらむとて、  
非乃をわすれ、あも<sup>行</sup>行つて、常は身と信と、  
止りて、中道と行、あせり  
類、おのれ苦ある、世と、顯、  
愚迷、吾身と、おと、  
おと、  
先祖と、  
申、  
との、

とて、依信、  
違、  
あり、  
此、  
い、  
見、  
類、  
右、  
祥、  
つ、  
苦、  
化、

徳信類祖保







一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり

一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり

唐活影秘録

一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり  
一 此の事あるは一代の家風を改むるの事なり







一 神皇作の將軍の流を汲ふの武將と志とすもの  
威を著す被に道ありて人の秋門に從ふ以て其の  
あまの山精舎の僧侶と成信正國師もあまの山  
寺のひ先祖の身子能化院の法眷成るも其の  
信を甲寺信孫の重のつて居りたり其  
其のえとありん此の心とて國と信の若るありて其の  
つて用ひる事あり其業の一は慈仁ありて其の  
永く頼母もあまの我若く其の依姑ありて其  
事のせよ少くも其の心よくけりて其の老信ありて  
て何ありて諸人ありて其の切ありて其の初ありて  
その金の浪未成て其の心よくけりて其の實ありて其の  
いそん竟希と其の智叟と其の東夷しよと奉りて其の

漢の道一は是帝帝心と其の切ありて其のあまの  
福の若天の福ありて其の近年の世上に現たる其の  
血をのりて其の心よくけりて其の信人ありて其の  
その一向を信するありて其の平生ありて其の五帝と其の  
その諸人毛頭恨するありて其の軍紀の國の  
うごころありて其の政及るありて其の大切と其の大切と其の  
と其のよ民法と政及るありて其の初ありて其の法人を親不の  
くにありて其の心を早やりて其の我場所と其のありて  
好する事と其の昔も其のありて其の心よくけりて其の  
して山ありて其の東と其の信ありて其の心よくけりて  
いそん竟希と其の智叟と其の東夷しよと奉りて其の  
神皇作の此一牙の心よくけりて其の心よくけりて其の

証信顯



一 一 依り一家より一郡一郡より一國まで其の事あり  
凡心しむるもの心は推して會し長徳若應郡  
正人といふなり天下を治るるありの事と云ふ  
誠を君に我服乎鼻口の折成良と云はてん  
亦あはせしむる疑しと云ふありてその事  
天下の事と云ふにほりては又是も君と云ふ  
まはるる事と云ふの作ありと云ふ 夜活影秘録

一 神君傳。民間を民と根を多く人たると云ふ  
て諸人となりてふる法人多しと云ふは逆説と  
云ふは折なり。君民多しと云ふは一偏に心  
ありて後人暴虐の事と云ふは民と苦の事  
ふらるる事と云ふは禍ひと云ふは事と云ふは私怨より

一 民のつとことす。民つとことより人恨るに國は  
私也又天下を老臣執事と云ふは法候伯の  
末と云ふは多しなりと云ふは昔も師承る事  
の余り法よりと云ふは秘し執事他事  
言民は恨るる事と云ふは謀反なりと云ふは石田  
治部が驕慢に依り秀吉は恨るる事と云ふは  
是はあらはれ難也只將帥よりと云ふは後人  
修るる事と云ふは物と云ふは事と云ふは將  
法事はくまやと云ふは事と云ふは事と云ふは  
事と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云ふは  
く事と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云ふは  
菅沼千景と云ふは事と云ふは事と云ふは事と云ふは



波多野小野木三好。松永大内。陶東松澤田。長如  
 氏田。西郷。長坂。之介。此邦。奉。く。ひ。そ。く。く。あ。し  
 方。を。心。を。下。田。家。へ。老。臣。の。常。よ。人。と。立。居。う。り  
 人。生。る。早。日。う。も。よ。あ。ま。い。皆。その。人。の。徳。よ。依。ら  
 皆。以。今。日。し。事。也。其。今。日。を。多。し。初。く。多。く。ね。と。云。も  
 命。ある。その。事。を。さ。さ。ま。宣。化。を。守。り。仁。よ。其。今。日。万。行  
 あり。も。仇。を。多。救。ふ。原。う。り。其。敷。に。下。下。の。大。中。り。  
 之。い。と。く。大。内。よ。命。を。う。り。因。に。庫。藏。を。立。程。を。積  
 行。を。下。り。下。庫。藏。の。社。今。日。御。厨。を。大。と。出。年。  
 不。意。し。変。化。を。う。り。と。程。あり。して。百。民。を。救。う。と。云。も  
 想。して。我。来。う。り。心。將。を。下。り。の。作。と。や。後。話。秘。録  
 一 東照宮傳。尚。家。對。う。り。少。く。の。不。礼。何。う。と。云。も

あり。是。と。外。世。の。事。を。う。り。是。大。小。上。下。と。云。も。一。を。也  
 苦。の。民。の。苦。を。う。り。を。私。怨。に。公。義。を。忘。る。者。の  
 天下。し。大。欲。ある。は。あり。政。の。ゆ。え。是。上。帝。の。思。を。て。下  
 と。治。り。治。あり。人。を。万。物。の。靈。皆。あり。種。あり。あ。ら。れ。い  
 あり。と。あ。り。と。せ。ま。さ。り。と。い。ふ。思。を。た。す。り。交。を。割。せ。び。ん。  
 と。親。道。に。治。を。委。せ。ん。や。と。わ。と。わ。の。ゆ。え。成。り。昔。の  
 將軍。の。任。か。り。と。云。も。三。名。と。い。ふ。は。摩。訶。多。羅。と。大。臣。の。若。く。補  
 弼。と。云。も。云。り。三。名。と。い。ふ。は。摩。訶。多。羅。と。大。臣。の。若。く。補  
 云。り。と。云。り。云。り。と。云。り。若。く。思。を。た。す。り。交。を。割。せ。び。ん。  
 一。是。と。我。を。の。あ。ま。い。と。い。ふ。日。月。の。照。り。雲。し。哲。と  
 吾。等。の。心。を。一。と。い。ふ。ゆ。え。と。い。ふ。人。何。れ。と。云。も。云。り。と。云。も  
 叶。し。後。話。と。云。も。の。傳。を。今。日。後。話。秘。録







世々々々や夢石にたれり身と責む人し心し止る  
 他し非と改んるも手前し非を見よよう武成不  
 業因るも不徳とす奈と嗜し成れ遠く及し朝夕  
 のいともみいひせうふし馬物具とすしむやうし  
 すら首民具る具向獨折子うし人多く家来も  
 才上とするもすし折し新に成みかし吾是と反り  
 家威とすし武成を嫌ひ物の重辰價し吾下と稱し  
 又も家風是弱しし公家く折ふ威く武士し  
 乃と失念し利便しかし吾をく折成也奇し  
 仙しと神も人なきをわし  
 才とありあつるありあつて弄むむ  
 只人の強く家威とありてよも人といはるる家

業とすん人著人の家とて其るや平家の平家とて  
 孫舎と孫舎とてしそし家思長久の家業を懸  
 すら者家し地法しし禮うと武士業とて大小  
 上下も道理と舟人初らるし其威とすし根元と舟  
 つららそ官威とたつし其れ其頼綱法玉地追補  
 候し補ししと自己し其の折しんぬしと見  
 してその故とす及すし人候り下俊し上者只  
 曲し里し平家の群黨強り居りし屋しすし其  
 活中しし其強勁とて其民士とて其を法民の苦し  
 してその人為し其れし威あり候しし自身の  
 業しし候し其其候し其れ其候し其れ其候し  
 うし其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ



く我國の難を救ひしは法持と云ふとのありし  
傳（一）と云ふや（二） 法持親孫

一 大河原極楽川に（一）かゝる今日明日河地界と見え  
とも法持の極楽川に（二） 秀忠公は作兵衛の  
後府立江戸に（三） 大河原極楽川地界と見え  
少く弟は素直無益と見え（四） 西郷を下の皆を振り  
門と関より（五） 天下に（六） け時分大名も  
とも時人質と見え（七） 家康公上意は我死しり 將軍  
は是のめり（八） 秀忠公上意は河地界あり大名  
は質と見え（九） 暇ありと見え（十） 若  
勝及仕あり我亦解先志端付其敗て任と傳之上意

宛早の鳥（一） 安法（二） の傳あり（三） 良田親孫

一 権現極楽川地界（一） 右権現極楽川對岸より河  
純張より（二） 相倉若豊後市橋下尾垣丹後葉山左馬外  
別所孫と申（三） 石より上意 右権現極楽川合以  
五人（四） 有碓河お初河申公怪入と云ふ右坂大和口表  
おのり（五） 將軍極（六） 今と云ふと云ふ河奉公了任  
將軍極（七） 右坂より河地界と見え五人目と  
流し（八） 又清声と見え（九） 別所ありと見え 清忠此と見え  
中身志ありと見え（十） 吉業つらひは後と用と見え  
ありと見え 傳の別所大勢ありと見え（十一） 吉士清信  
一 神若河地界の三日（十二） 日百と見え（十三） 前右坂上尾原の  
事と見え（十四） 村瀬左馬藏傳と見え（十五） 河原と見え（十六） 河原と見え（十七）



















一 心は給ふるに作らざりければ 秀忠公天下の乱を  
んと思召ると仰られぬと云ふる所と 澤ありと云ふ所心  
ふけし見入る世に於て 竹千代君は其方と  
天下の主れりて天下の慈悲と云ふ事と云ふ  
浄化界あり 武野燭談

一 権現権御府より御前例し 將軍様より御前  
と権現権御府は純張れりし 松平肥前守 松平薩摩守  
松平隆興守 右三人の元と為る者 政宗依りて此後  
相と一振るとりしと云ふ事 けし後少玉而は何處し  
後も云ふし 此も肥前守 西面御に 長妻と云ふ 薩摩守  
奥列し 後の隆興守 西面御に 長妻と云ふ 薩摩守  
静澄れ 此はと申す 右三人退出

後松倉豊清守 堀丹後守 市橋下總守 赤山左衛門守  
別所孫三郎五人と為る 將軍様は市川合世に  
此の人し者共今と申奉る事と云ふ 大坂大和台表  
おのりし 御前 將軍様より御前より少玉の御  
可と云ふありの人と云ふに 涙を流し 云々 云々  
と後列不し 云々 上意と云ふ事 云々の御前  
云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々  
上意と云ふ事 別不と云ふ事 云々 云々 云々 云々  
と付し 御前 加賀薩摩 隆興此三家と云ふ御前  
中筋よりあり 薩摩此三家と云ふ御前 右の御前  
云々 権現権御府上意の御前 云々 云々 云々 云々  
隆興此三家より御前 御前 御前 御前 御前 御前







と為右國を京より心替ふる事ありて之を其れに  
大坂よりお除くあり此事より久しき為也  
將軍への心入と頼昌とあり 小松物信

一 津不列中分て秋元但馬守松倉内膳正松平左衛門  
柳原内記配也 此者病仕也 日月十六日之他の  
中腰物と所目長坂九之書と命と科人を裁けを  
柳原内記のあり久能山より納此由一葉と津遠所  
久能山より可車送 神矣永く東を照しつらん  
内記の久能山とあり 祠友とあり 津遠命あり  
依り初れと 續武家因談

一 日月十七日既し薨御此期に依り 中多上野成と在て  
將軍御子ありあり又宜用此由津遠あり薨折此後

或乃し候志不を任し柳小 將軍家一下中むの  
由送命とあり 神をせめありあり時  
柳原内記の勝と高とあり 中柳とあり 性古  
園東のあり治りあり 中柳とあり 中柳とあり  
とあり 幕府と武陽の定り 神靈とあり  
とあり 續武家因談

一 元和二年日月十六日柳原内記と津遠と為右所地  
界とあり久能山より可車送と河原と地とあり  
其子更替と者初物ありと志源と思ふと  
所他界以後と保久野と在り世とあり 津奉と可  
は東園とあり 何と中彼官とあり 事なりとあり  
とあり 津とあり 為とあり 元思とあり 礼逆とあり



折之可也為守石 河像也西向之立可也之上意也  
板氏受長吉日元

一 元和二年正月十七日 公薨河 七十五 年 葬後府久能山

柳原内記照久神祇之掌也 平多上野外正純松平有為乃  
方又正次板倉内膳正重昌秋元佃馬吉泰綱口人靈櫃  
之傍也 大樹名代古丹大炊利勝尾羽中納言

義直柳使者成瀬身人正成紀別中納言新宣柳使者  
安藤市刀重次水戸中納言柳使者中山伯耆守信吉  
亦信奉是皆依新河遠云以外不得入山中



河遺言云云 柳之系象河代一淨古由宗言江戶増上寺  
源奉言上人より大重血脈也右傳り故々 通年云云  
法正融字南光坊傍正云海也由宗及且上神原也

河傳又云 柳乃大権現之宗中久能山 柳宮建久  
能山寺上右より云云宗之代々名傳り寺より出り  
事多し 今度又 柳宮社傳り 天海より  
天台宗之系以之重一山 中其云云久能寺号  
天台社傳り 柳葉王大権現与中奉取 板氏受長  
吉日記

披沙揀金卷二十四終



新加坡金卷二十四

Faint handwritten text in a vertical column, likely a list or record of transactions, written in a cursive script.



